

Title	現象学的反省と超越論的言語
Sub Title	La reflexion phenomenologique et le langage transcendantal
Author	谷, 徹(Tani, Toru)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1982
Jtitle	哲學 No.75 (1982. 12) ,p.121- 142
JaLC DOI	
Abstract	Cette essai cherche a traiter le probleme de la reflexion transcendentale et son langage dans la phenomenologie. Husserl a tente de reflechir par le biais de la "reduction derniere" sur le present vivant (lebendige Gegenwart) qui constitue tout. Mais chez Husserl, la reflexion positionelle transforme le present vivant en objet temporel (Zeitobjekt), ce qui l'empêche de saisir sa vivacite. Il nous semble que l'echec de sa theorie de la reflexion ne porte pas sur un defaut de la reflexion elle-meme, mais plutot sur celui du rapport entre la reflexion et son langage. Nous posons donc le probleme du langage transcendantal qu'utilise la reflexion transcendentale. En discutant ce probleme, nous introduisons la theorie du langage de J. -C. Piguet. Ce faisant, il devient clair que le defaut de la reflexion positionelle a pour cause l' introduction du Langage Scientifique(LS)dans la reflexion. Plus justement, entendement de soi donne a la conscience silencieuse du present vivant doit etre pane en Langage Metaphysique (LM). Ainsi, ce LM a pour fonction de creer une signification fondee sur le pre-sens, cette signification devant etre a son tour confirmee par rapport au pre-sens. Cette motion circulaire est la maniere de signifier propre au langage transcendantal.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000075-0121">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000075-0121</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 現象学的反省と超越論的言語

谷

徹\*

**La Réflexion phénoménologique et  
le Langage transcendantal**

*Toru Tani*

Cette essai cherche à traiter le problème de la réflexion transcendente et son langage dans la phénoménologie. Husserl a tenté de réfléchir par le biais de la "réduction dernière" sur le présent vivant (lebendige Gegenwart) qui constitue tout. Mais chez Husserl, la réflexion positionnelle transforme le présent vivant en objet temporel (Zeitobjekt), ce qui l'empêche de saisir sa vivacité. Il nous semble que l'échec de sa théorie de la réflexion ne porte pas sur un défaut de la réflexion elle-même, mais plutôt sur celui du rapport entre la réflexion et son langage. Nous posons donc le problème du langage transcendantal qu'utilise la réflexion transcendente. En discutant ce problème, nous introduisons la théorie du langage de J.-C. Piguet. Ce faisant, il devient clair que le défaut de la réflexion positionnelle a pour cause l'introduction du Langage Scientifique(LS) dans la réflexion. Plus justement, l'entendement de soi donné à la conscience silencieuse du présent vivant doit être parlé en Langage Métaphysique (LM). Ainsi, ce LM a pour fonction de créer une signification fondée sur le pré-sens, cette signification devant être à son tour confirmée par rapport au pré-sens. Cette motion circulaire est la manière de signifier propre au langage transcendantal.

\* 慶應義塾大学大学院文学研究科哲学専攻（倫理学分野）博士課程

## 序

フッサール現象学の課題は事象そのものを記述することだった。<sup>(1)</sup> 彼のこれまでの著作は、事象そのものへと向かう姿勢に貫かれている。ところが、事象について記述する言語については問われたことがなかったのである。確かに『論理学研究』から『経験と判断』に至るまで、フッサールは自然的な言語については（超越論的立場から）繰り返し論じている。しかし、ここでE. フィンクの次の有名な言葉を引用したい。即ち、フッサールは「超越論的言語の問題を自分では立てなかった。」フィンクに依れば、フッサールにおいては「超越論的論理学（言語論）」の概念は（現象、エポケー、構成などと並んで）「操作的」な概念にすぎない。つまり、この概念は、自然的な生活から引き出され、そのまま無批判に用いられているのである。<sup>(2)</sup> ここでフィンクの言う「超越論的論理学」を私は次の意味に理解したい。即ち、自然的経験における言語及び述語作用の理論（これがフッサールの主題だった）ではなく、むしろ、現象学が超越論的分析を遂行する時に用いる言語の理論である、と。あるいは、「現象学が扱った言語」の理論ではなく、むしろ、「現象学が用いる言語」の理論である。<sup>(3)</sup> この意味での「超越論的論理学」を操作的なままにしておくことは、「現象学が扱った言語」をそのまま「現象学が用いる言語」にしてしまうことである。しかし、この二つの言語が（例え微妙な関係にあるにせよ）<sup>(4)</sup> 単純に同じ言語だという保証は何処にもない。少なくとも、その点を問うことなく「記述する」というのは、事象そのものを見失うという危険すら含んでいる。

この問題はもちろん現象学の全場面において提起することが可能であり、また必要でもあるだろう。しかし、この問題提起の重要性が最も露わになるのは、現象学の究極的な事象としての「生ける現在」(lebendige Gegenwart) の場面においてである。——現象学にとって世界及びその時間の

全ては、超越論的自我が構成したものである。従って、世界及び時間の構成の秘密を把えるには、現象学的還元を通じて、超越論的自我を反省せねばならない。この反省の究極的段階において、絶対的構成者としての超越論的自我の根源的様態（生ける現在）が問われる。これを問う反省の方法は「徹底化された還元」あるいは「究極的還元<sup>(5)</sup>」と呼ばれている。フッサールは既にこの還元を通じて、流れつつ立ち止まる機能現在としての生ける現在の「原事実」(Urtatsache, Urfaktum)<sup>(6)</sup>を見出していた。この原事実は、事物あるいは世界が「事実的」(faktisch)に構成されているという事とは、別の事柄である。事実的なものは、時間内的に、つまり時間化され個体化された時間客観として、構成される。また一般的に、事実は本質（形相）に対して偶然的であり、それ故、本質の方は事実から離れて把えうる。しかし、超越論的自我の事実性だけは別であり、「超越論的自我の形相は事実としての超越論的自我なしには考えられない。」<sup>(7)</sup>つまり、超越論的自我の事実性は、その形相の前提条件なのである。何故なら、超越論的自我は「全ての構成作用の原点として、事実と形相との区別の措定に先行する<sup>(8)</sup>」からである。このような絶対的構成者の事実性、つまり事実と本質との区別に先行する事実性が、原事実と呼ばれたのである。——しかし、問題なのは原事実的な生ける現在を解明する仕方そのものである。ここでフッサールの分析は大きな困難に突き当たる。自我は生ける現在を自己反省するが、しかしその時、自我は自己を時間客観化、存在者化してしまう。そのことによって、自我は生ける現在の生動性を把え損ってしまう、という訳である。ここで、反省は先反省的なものの「後からの覚認」である、という有名な言葉が前面に出てくる。しかし、これは反省の全面的な挫折であろうか。例えば、L. ラントグレーベやK. ヘルトは、反省の問題を「キネステーズ意識」やハイデッガー的な「情態性」から把え直し、解釈し直すことを提起している。また、P. リクールも、このような反省を方法とする現象学に、解釈学を「接木」することを主張している。更に

は、M. メルロー・ポンティの「超反省」はもちろん、J.-P.サルトルの「純粋な（浄化的）反省」もここでの反省の問題に対する批判あるいはその克服の試みとして把えることができるだろう。しかし、これらの批判は反省の問題を事象の側からしか扱っていない。つまり、反省の用いる言語という視点からの批判はなされていないのである。しかし、反省にとって言語が必要なことは自明であろう。とすれば、反省がどのような意味作用をもった言語を用いるのか、ということは決定的に重要な問題であろう。この観点から、本稿は、超越論的反省とその用いる言語（超越論的言語）との関係という問題を考察しようとするものである。

そこで本稿の論述の順序は次のようにしたい。最初に、フッサールの（超越論的論理学を欠いた）反省が、どのような仕方で困難に陥ったか、を明確にせねばならない。次に、超越論的言語の問題の所在を明らかにするために、重要な先駆者としてJ.-C.ピゲを紹介する必要がある。最後に、これらに基づいて、フッサールの反省が陥った困難の言語論的な構造を示し、更に、生ける現在の次元における反省と超越論的言語との関係の問題を考察してみたい。

## 1. 措定的反省の限界

フッサールは既に『内的時間意識の現象学<sup>(9)</sup>』以来、根源的意識（生ける現在）の「反省可能性」を問題にしてきた。この問題は所謂後期時間論に繋がっていくが、その中間の時期の『第一哲学』には次のような有名な箇所がある。「もちろん、私が反省を始める時には、自己忘却した自我の素朴な知覚は既に過ぎ去っている。私は今、反省しつつ、この知覚を把握するのだが、それはただ所謂“過去把持”の“まだ意識して持っていること”の内に入って素早く遡って把えることによって、なのである……。ひとえにこのような仕方において反省的に遡って把えつつ、私は素朴な知覚と自己忘却した自我とを覚認 (gewahren) できるが、覚認とは言ってもそれは

本来的には後からの覚認 (Nachgewahren) であって、決して本来の知覚的把握ではない。しかしそれでも把握なのだ。<sup>(10)</sup> ここでいう「後からの覚認」とは、前もって何らかの仕方では知られた自我の遂行を、後からその過去把持の中へと入り込んで把える、ということである。この反省が本来的な知覚的把握ではない限り、ここには措定的反省の一定の限界が示されている。しかしそれと共に、その措定的反省に先立つ何らかの自己知の問題が示されていることも見落としてはならない。というのも、先行する素朴な遂行が完全に失われているならば、後からの覚認というのは無意味だからである。このような反省の問題性をフッサールはそのまま後期時間論の中へと持ち込んで行ったのである。この時間論の主題は生ける現在である。この時、生ける現在についての反省 (究極的還元) の持つ問題性が、予め現象学的反省そのものの構造の考察を通じて、明確にされねばならない。しかも、この反省についての考察 (反省論) それ自体も、現象学の一部門である限り、論弁的な推論ではなく、経験に基づかねばならない。

現象学においては、反省経験を含めて全ての経験は自我の構成による。従って「全ての経験の可能性の発生的根拠についての問いは、……究極的に作動する自我についての問いと重なるので、反省の徹底化は、純粹自己知覚への還元として特徴づけられる。<sup>(11)</sup>」この場合、全ての経験の根拠としての自我は「原現象」「原現実性」だとされる。この原現象こそが現象学の最大の問題であるにも拘らず、主著『イデーオン』第一巻でも単なる時間的意識流しか扱われていなかった。生ける現在の問題において初めて真の超越論的自我が問われるのである。——反省は自己把握に向かい、その必然的明証を得ようとする。確かに自我は常に自己の作動を反省できるが、しかし、私が自己を対象化的に把えるなら (措定的反省を遂行するなら)、その時、私は既に自己を「時間客観」(Zeitobjekt)<sup>(12)</sup> として理解している。ところが、そのような時間客観は事実的なものであり、必然的には認識されない。この点に困難が存する。——そこで問われるのが、究極的に作

動する自我の現在化作用」(Gegenwärtigung) そのものである。というのも、現象学においては反省は自己についての現在化作用だからである。自己現在化作用において自我が反省されるのは、「覚認する自我と覚認される自我との間に既に、距離、<sup>(13)</sup>“分岐”(Spaltung)が存して」おり、「それによって反省の視光線が、自我から自我へと向けられることができる<sup>(14)</sup>」からである。「しかし、この“自己分裂”にも拘らず、“両方”の自我の統一の意識は失われない<sup>(15)</sup>」、即ち、両方の自我は「根源的に一致している」(ureinig sein)。要するに、一方で自我は流れることによって、措定的反省に必要な自己自身との間の「原距離」(Urdistanz)を生み出す。他方で同時に、その自我は常に既に自己と統一されている。この二つのことによって、自我自身についての措定的反省が可能になるのである。こうして、生ける現在の前反省的な自己分岐(流れること)と自己統一(立ち止まり性)という両義的事態が、現象学の中で、措定的反省そのものの可能性の根拠として見出されるのである。

ところが、措定的反省はこの前反省的な事態を完全に把えることはできない。というのも、措定的反省には時間客観化、存在者化<sup>(15)</sup>(Ontifikation)という作用が伴うからである。先述のように、現象学においては反省そのものもひとつの現在化作用であり、この作用は常にそれに対峙するものを構成する。従ってその作用極としての自我も、その対峙者なしには(純粹内在としては)成り立たない。それ故、「自我はただ根源的に自己を自己時間化<sup>(16)</sup>するものとしてのみ、……証示されるのだから、自我は常に自己を存在者化<sup>(17)</sup>するとも言えるのである。」要するに、措定的反省はその機制上、必然的に自己を存在者化してしまうというわけである。「こうして、自我は、存在者化という形式においてのみ自己自身に近づき得る<sup>(17)</sup>。」この意味で「絶対者〔生ける現在の自我〕は絶対的時間化作用以外の何者でもない<sup>(18)</sup>……。」

本論文の本来の問題はここから始まる。即ち、(1)措定的反省は存在者化であること、従って、生ける現在の作動そのもの（生動性）は把えられないこと（生ける現在の匿名性）。それにも拘らず、(2)この「原現象の匿名性はそれ自体なお何か知られたものである<sup>(19)</sup>」ということ、つまり前反省的な自己連関あるいは自己の「現」(Da)が経験されること。この二つの事態の間関係は、事象的には（現象学的反省論—時間論にとっては）生ける現在の両義的事態として示されたが、しかし、現象学的反省論—言語論（論理学）にとってはこの事態の持つ意味は未だ明確になっていないように思われる。誤解を避けるために、予め確認しておくが、この問題は二重に超越的に考えてはならない。例えば、この問題は「反省は時間的に先立つものについての反省だから、それを後からしか把えられない」ということではない。これは超越的時間を前提にした推論である。生ける現在が時間化作用そのものである限り、時間的前後及び同時性を構成するのは、まさに生ける現在である。そして、この生ける現在の時間化作用（ここでは存在者化）において初めて「後からの覚認」という意味が構成される。この経験こそが超越的時間の根拠なのであって、予め生ける現在を超越的時間の中に置いて考えてはならない。とすれば尚更、この問題は「世界を見る眼そのものはその眼には見えない」ということでもない。現象学的反省論—言語論は、あくまでも現象学的な経験に基づくものである限り、「何か知られたもの」としての自我の作動は経験されているのであって、その経験が前提されるからこそ、措定的反省経験において、生ける現在の存在者化とか「後からの覚認」と言えるのである。従って、「何か知られたもの」としての自我の作動も、その存在者化も、（例え経験様式は違っても）共に経験されているのである。とは言っても、それだけでは、前反省的自己知が措定的反省によって存在者化される、ということを再確認したにすぎない。<sup>(20)</sup> 一見すると原現象の問題はこれで行き詰まったかのようにも思われる。しかし、ここには二つの重要な問題が隠されている。第一に、我々



は以上のように原現象の問題を考察してきたが、その際、紛れもなく言語を媒介にしてきたし、今もしている。しかし、その言語の「意味作用方式」については全く問題にしていない。つまり、現象学的反省論の言語論（超越論的論理学）が欠如しているのである。我々はどのような仕方、これまでの記述を理解すべきなのか。「現象学が用いる言語」とはどのような言語なのか。第二に、上のように言語を問題にしなかったが故に、フッサールは、自然的な措定的言語の性格を、反省の言語に、更には反省そのものの構造にまで持ち込み、その結果、反省を硬直化（措定的反省）させてしまったのではないか。<sup>(21)</sup>——このような問題があるならば、現象学の展開にとって「超越論的論理学」について問うことは急務であろう。現象学が自然的世界の信憑をエポケーするならば、同時に自然的言語の信憑もエポケーせねばならない。

## 2. 形而上学的（超越論的）言語の問題

ここで私は超越論的言語の問題の先駆者としてピゲ (J. -C. Piguet) を取り上げたい。彼の主著『美学から形而上学へ』は1959年に出版されているが、その内容はあまり知られていない。<sup>(22)</sup>そこで、ピゲについて私の立場から、その現象学的方法論に重点を置きつつ紹介しておきたい。（尚、彼は形而上学的言語LMという用語を用いるが、超越論的言語を念頭に置いている。）

「形而上学は事象についての言説である。」しかし「どのような言説か、どのような事象か。」<sup>(23)</sup>このことが彼の提起する問題である。彼は、これまでは科学が形而上学のモデルであったことを批判し、美学をそのモデルとすることを主張する。（これが著書名の由来である。）そこで、科学、芸術、美学の言語の「意味作用方式」(manière de signifier) が問われることになる。これらの意味作用方式の分類は、次に述べるように言わば現象学的言語の現象学という方法で獲得される。ここで予め述べておけば、こ

の分類は「科学的言語LS」「詩的言語LL」「形而上学的言語LM」である。——LSは端的には科学の言語だが、広くは自然的言語の典型でもある。LSは、言語自体は実在的でなく、むしろ、その言語が意味するもの（実在）への出発点となる。この特性は象徴的 (symbolique) と呼ばれる。LLは芸術作品の言語である。LLは作品としてその言語自体が実在的であり、その言語の意味とはこの言語自身である。従って、LLは実在的な到達点である。この特性は表出的 (expressif) と呼ばれる。LMは美学（それをモデルにした形而上学）の言語である。LMは、LLとは違ってその言語自体は実在的ではなく、実在（作品）を指示する。しかし、LSとは違って、実在が捉えられるのは、その言語から出発してではない。具体的に言えば、人は美学の分析から出発して、作品の直観に到達するのではない。むしろ、作品を見た後で、批評家の言語が理解されるのであり、従って、この言語は到達点である。この特性は指示的 (indicatif) と呼ばれる。

さて興味深いのは、言語の意味作用方式の分析の方法であるが、ピゲは二重のエポケーという方法をとる。その場合、フッサールと同様、最初は自然的態度のエポケーが問題になる。但し、ピゲにとって問題なのは、世界の現前ではなく、言語の現前である。自然的態度においては「意識は言語の中にあり、言語によって働いている。言語は、主観と対象とを緊密に溶合させる自然的環境である……。」<sup>(24)</sup>そこで第一のエポケーは自然的環境としての言語に向けられる。つまり、自然としての言語への信憑を中断するのである。このエポケーによって、主観の側では意識と言語との自然的結びつきが解かれ、意識は言語から離れて沈黙に至る。この意識は語らずに知覚する意識である。また対象の側では言語はもはや自然的にあるままの (tel que) 言語ではなく、沈黙の意識のノエマである限りの (en tant que tel) 言語となる。この時、沈黙の知覚作用意識は、いわば「言語の外」から言語を問うていくのだが、しかし、これだけでは不十分である。というのも「言語の自然的な意味作用方式」はまだそのまま自然的環境として

残っているからである。従って、第一のエポケーによって得られた「言語の意味」に対して更に、第二のエポケーが、この言語の意味の意味作用方式に向けられる。<sup>(25)</sup> このエポケーによって、主観の側では意識は、シニフィアン・シニフィエ関係の外<sup>(26)</sup>に立ってその関係を問うところの審級（法廷）としての、純粋な知覚作用意識になる。また対象の側では、あるままの意味作用方式はある限りの意味作用方式となる。こうして最終的には、一方で純粋な意識（超越論的意識）と、他方でその純粋な相関者即ち端的な現前（言語の意味の意味作用方式）が獲得されるのである。

ここで先ず、意識は二つの意味作用方式を見出す。一方でこの現前をシニフィアンとして、他方でそれをシニフィカシオンつまり意味（作用）そのものとして。前者の場合、意識に現前するのはシニフィアンだけだが、これは常にシニフィエを象徴する。そして、シニフィエは常に意識の領野の外部の対象（超越）<sup>(27)</sup>である。これが先に述べたLSの意味作用方式である。要するにLSは「意識による世界」<sup>(28)</sup>を展開する。後者の場合、現前は外部を示さず、自己自身を示す。つまり自己意味的なのである。ピゲはこの場合を更に二つに区分する。即ち、この自己意味（作用）がその意識自身によって形成された場合（芸術創造）と、他者によって形成された場合（芸術観賞）である。創造の場合、主観（意識）と対象（事象）との間の超越関係は、主客の統一としての意味（作用）の中へと解消される、とピゲは言う。これがLLの意味作用方式である。要するにLLは「意識の世界」<sup>(28)</sup>を展開する。これに対して観賞の場合、意識は沈黙の知覚作用であり、それが語る時にはLMの能弁な意識に転ずる。LMの知覚作用意識は、他者によって形成された意味（作用）として現前を引き受ける。従って、LMの意識は、それが知覚するものを語る（parler qc.）のではなく（これはLLの創造的意識である）、むしろ、それが知覚するものに基づいて語る（parler sur qc.）のであり、この方式によって能弁（loquace）な意識となる。あるいは「実際、LMの能弁な意識はその言語LMを構成するのだ

が、但し、その言語の意味がLMの知覚作用意識によって、従って他者によって、その意識に与えられるという方式において、である。<sup>(28)</sup> 要するに、LLが事象（超越）を自己意味（作品）へと創造するのに対し、LMは、この意味の知覚に基づいて、この意味を指示するのである。<sup>(29)</sup> そしてLMの意識はこのような方式でのみ、常に能弁なのである。これがLMの意味作用方式である。要するにLMは「意識にとっての世界」<sup>(28)</sup>を展開する。以上のようなLMの意味作用方式は美学と形而上学に共通であるが、しかし、ひとつの大きな相違を忘れてはならない。「美学は対象の确实性〔作品〕を持つが、逆に形而上学はその対象〔何らかの仕方での意味〕を予感することしかできない。<sup>(30)</sup>」この意味が「沈黙の形而上学の意識の相関者でしかなく、言説の相関者ではない」限り、「形而上学にとって語るということは危険を冒すことである。」「形而上学は自分が語ろうとするものについて知らない。しかし、美学に尋ねることによって、誰が語るかは知り得る。その時、形而上学は正当に、自分が語ろうとするものについて知ることを期待できるのである。<sup>(30)</sup>」

### 3. 究極的還元と超越論的言語

これまで、第1章では、フッサールが生ける現在の解明に際して出会った困難（存在者化）を確認し、第2章では、ピゲの理論を超越論的論理学のひとつの試みとして示した。本章では、この二つの問題の関係を考察せねばならない。そこで先ず、存在者化そのものの構造を問い直し、措定的反省の言語LSに対応する性格と、言わば生き生きとした反省の言語LM<sup>(81)</sup>に対応する性格とを、分けねばならない。そして、真の超越論的自我が生ける現在である限り、LMをこの究極的還元の言語として把え直して行かねばならない。その時、いくつかの原理的問題を考察せねばならない。この考察は同時に新たな問題提起にもなるだろう。

存在者化と言語LS——第1章では、存在者化とは、自我が措定的反省

において自己を時間客観として措定してしまうことであり、このことは、自我の現在化作用そのものの構造として考えられていた。このことは、自己把握に関しては現在化作用と存在者化とは同義だということだろうか。もしそうならば、自我は常に自己を時間客観としてしか把えないことになる。ところが、フッサールは「時間を構成する諸現象〔生ける現在〕は時間内で構成された対象性〔時間客観〕とは明らかに原理的に異なる対象性である<sup>(32)</sup>」と述べている。このことはどうして言えるのか。このようなことが言えるためには、時間客観化しない自己把握が何らかの仕方で与えられていなければならない。あるいは、先述のように措定的反省が「後からの覚認」だと言えるためには、既に前もってその反省の事柄が、何らかの仕方で知られていなければならない。しかも、これは単なる推論ではなく、経験なのである。実際、フッサール自身も次のように述べている。「過去把持的位相が先行位相を、それを対象化することなく、意識しているように、既に根源的与件〔生ける現在〕も対象化〔存在者化〕されることなく——しかも“今”という固有の形式で——意識されているのである。<sup>(33)</sup>」とすれば、フッサールは、現在化作用と存在者化とは同義ではないことを、認めていたのである。つまり、自己に関する現在化作用の中で、存在者化せず今として自己を構成する作用（自己今化作用と呼んでおこう）と、存在者化する作用とは、区別されうるのである。但し、この二つの作用が別個に存立するか否かは、ここでは問題ではない。とにかく二つの意識作用契機が区別されれば十分である。<sup>(34)</sup>

重要なのは、この二つの作用契機と言語との関係である。存在者化と言語との関係から考察していこう。存在者化においては、生ける現在は時間客観として把えられている。この場合、素朴な現在化作用が(偶然に)自己自身に向かって、自我の時間客観を構成しているにすぎないのだから、素朴な自然的時間客観の構成と、反省においての時間客観の構成との間に構成上の相違はない。とすれば、存在者化の言語は自然的言語としてのLS

と違いはないだろう。更に厳密に見れば、この時間客観そのものが、生ける現在の時間客観として構成されている。ところが厳密に存在者化の機制に従うならば、生ける現在そのものは決して措定的反省意識には現前し得ない。とすれば、この時間客観それ自体が「意識の領野の外」の生ける現在を示すことになる。<sup>(85)</sup> (この「言語LS→時間客観→生ける現在」という二重の意味超越的關係は「感覺的なものの経済学」によって短絡されるにしても)、ここにはシニフィアン・シニフィエの間の「象徴的」な關係が成り立っている。従って、ここでは意識にとって、存在者化とLS型言語とは対応している。——しかし、存在者化という作用契機がLSに対応するのに対し、現在化作用あるいは沈黙の知覚作用意識には存在者化しない契機(自己今化作用)が含まれている。それでは、現象学的反省における現在化作用と存在者化の同一視はどこから来るのか。あるいは反省の措定的反省としての硬直化はどこから来るのか。意識そのものの構造からではないことは先に確認したとおりである。とすれば、硬直化(存在者化)は、LS型言語を超越論的反省の中に不当に持ち込んだ結果ではないのか。フッサールは自然的な経験及びその述語作用に関連して次のように述べている。「対象は、対象化する自我の能作の産物であり、卓れた意味で述語的に判断する能作の産物である。」あるいは「本来的には“である”という連辞形式において初めて“存在すること”の措定が“確固として”遂行される……。従って、卓れた意味での対象化はこの連辞的な“である”措定において……その目標に到達する。<sup>(86)</sup>」つまり、ここでは言語的な措定こそが本来的な対象化(反省においては存在者化)の根拠、条件だということになる。しかし、どのような言語か。フッサールが超越論的言語を問わなかった限り、この言語は自然的言語LSでしかあり得ないだろう。彼は、この素朴な「論理学」を無批判に超越論的反省の中に持ち込み、反省を措定的反省に硬直化させてしまったのではないか。そして、このことによって存在者化しない作用契機を見失ってしまったのではないか。とす

れば、時間客観としての自我とは、単に反省作用の産物であるより、LS型言語による措定的反省の産物であろう。<sup>(37)</sup>——従って、存在者化と言語LSとは、このような二重の仕方で対応し、あるいは共犯しているのである。しかし、超越論的反省に、このような言語LS及び存在者化を持ち込む必然性はないはずである。むしろ、現象学が超越的存在をエポケーし、それをノエマ、あるいは今の文脈では端的に意味として把えるものである限り、本来的には現象学は、意味に基づいて語る言語LMを用いるべきなのである。

ところが、例え上のLS型の存在者化を排除したとしても、究極的還元の場面に言語LMを導入することは、それほど簡単なことではない。というのも、ひとつには、一般に現象学においては自我はそれ自身が絶対的構成者（もちろん存在者化を排除した意味でも）である限り、美学におけるように外から与えられた作品（意味＝LL型言語）について語るというわけにはいかないからである。また、今ひとつには、存在者化しない自己了解は、差当たり「何か知られたもの」としてしか与えられないからである。それ故、次にピゲのLMについての理論を修正、補完せねばならない。

超越論的言語LMと受動性——ピゲは言語LMを、何らかの仕方で予め与えられた意味に基づいて語る言語として把えた。つまり、この言語は、予め意味が経験されて初めて、それを指示できるわけである。美学においては、この「与えられた意味」は作品であった。その限りで、「与えられた」という表現は素朴に理解される。しかし、自己経験についての現象学では、このことは超越的に把えられてはならないだろう。つまり、この「与えられた意味」は決して超越的外部から来るわけではない。あるいは、自我の自己経験の意味の内に、他者の構成による意味が含まれるとしても（このことは生ける現在の相互主観的構造によって可能だが）、この意味も、超越論的領野の内部での事柄である。現象学にとっては、自己経

験の「与えられた意味」も、やはり絶対者としての超越論的自我が構成するのでなければならない。とは言っても、この意味の経験の構成は能動的なものとは限らない。そもそも、自己把握においては、少なくともLS型言語に対応した能動性(全ての能動性ではない)は排除されねばならない。この能動性は常に存在者化を伴うからである。しかし現象学においては「能動性の形成物は全て必然的に、前もって与える受動性を最低層として前提している。<sup>(88)</sup>」とすれば、生ける現在の意味は、この受動的構成という仕方でのみ「与えられた意味」であることになるだろう。要するに、現象学においては「受動的綜合」(passive Synthesis)の場面でのみ、この意味が与えられ、それに基づいて語ることも可能になる。このような仕方では、言語LMは、(その意味作用方式によって)「何か知られたもの」としての自己了解を前提するのである。——しかし、この綜合の構造そのものは、事実的なものについて既にフッサールが述べたことである。ところが、究極的還元においては「原事実的」なものが問題になる。あるいは、事実的なものの受動性であるより、むしろ、原事実的なものの「原受動性」(Urpassivität)あるいは「原性」(Urtümlichkeit)そのものが問題になる。この「原」という表現は時間内的なものではなく、その構成者を形容する。<sup>(89)</sup>このような原受動性と言語LMとの関係が次に問われねばならない。

超越論的言語LMと究極的還元——言語LMの能弁な意識が、その沈黙の知覚作用意識に与えられた「原受動的意味」に基づいて語る時、言語LMは、まさにこの原受動的意味を指示している。つまり、言語LM自体の意味は原受動的自己経験が与えるのである。しかし、例え存在者化しないうにしても、LMの能弁な意識がこの原受動的意味に基づいて語るという限り、そこには別の仕方での能動性が含まれることになる。その時、原受動性と能動性との関係は次のような問題を提起するようになる。即ち、意識が受け取る意味は「何か知られたもの」でしかない。つまり、美



学の場合のような確実性を持った対象の意味ではなく、むしろ、不確実な「前意味」「前知」「沈黙の知」-(<sup>(40)</sup>pré-sens, pré-savoir, savoir silencieux)とでも言うべきものである。しかもこの場合、「前」「沈黙の」という表現は(メルロー・ポンティとは別に)最も強い意味に解さねばならない。即ち、原受動的という意味に、あるいは、この原受動的意味を受け取るLMの意識の沈黙の意味に、解さねばならない。というのも、究極的還元における「前意味」は事後的、時間内的なものの意味ではなく、原事後的、超時間的なものの意味だからである。例を引いて言えば、この「前」は「前述語的経験」(vorprädikative Erfahrung)の「前」ではない。この前述語的なものの受動性は「エンテレキーに至るべきデュナミスとして既に存している」<sup>(41)</sup>。つまり、予め、能動的述語化の可能態として与えられているのである。しかも、この前述語的なものが予め語り得るものであるのは、(フッサールの分析が示すように)それを事後的な世界の地平構造が信憑の基盤として支えるからである。ところが、原事後的な生ける現在の前意味はこのような仕方では与えられていない。(だからこそ、前述語的なものをLS型言語によって述語化するという自然的な仕方では、生ける現在の生動性は捉えられなかったのだ。)それでは、LMの能動性は原受動的な前意味についてどのように語るのか。究極的還元は「素朴性の最後の克服」として、LS型の「能動性を禁止」<sup>(42)</sup>せねばならない。この時、沈黙の意識には(自己今化作用によって)原受動的な前意味(自己了解)が与えられることになる。LMの能弁な意識の能動性が言語LMによって語ろうとするのは、この前意味についてである。ところが言語LMの意味は、その意味作用方式によって、この不確実な前意味を「出発点」にしている。とすれば、このLMは原理的に十全的に「指示」することはできないことになる。つまり、LMは意味の過剰請求である。従って、ここではLS型言語の意味から出発する素朴で直線的な「意味志向→意味充実」<sup>(43)</sup>の関係は成立しない。それにも拘らず、LMが「指示」するならば、LMは、それ

が指示する前意味の前で消え去りはせず、むしろ、この原受動的な前意味の前にとどまり、絶えず、その覚醒を要求するだろう。それ故、言語LMは常に前意味を受け取る沈黙の中へと引き戻されて確認されねばならない。しかも、この確認の法廷としての意識は、それが沈黙の意識である限り、この沈黙に基づいて再び言語LMによって判決を下さざるを得ない。究極的還元において言語LMが語るということは、このような往復運動を引き受けることに他ならない。そして、この限りで、ピゲの言うように、LMの意識は「常に能弁」であり、あるいはフッサールの言うように、究極的還元には「<sup>(42)</sup>継承性」が不可欠なのだ。

こうして、究極的還元は、その言語LMによって、原受動性と能動性との往復運動の中で前意味つまり生ける現在の「諸々の内包を〔自己〕展開」する。とすれば、この運動の内側にある限り、生ける現在の自我にとってこの往復運動はそれ自体、一定の自己「創設作用」(Stiftung)であろう。もちろん、生ける現在の自我が絶対者である限り、創設作用は当然の事だが、ここで重要なのは、この創設作用は、単に意識のみの構造というより、むしろ、言語LMの構造(意味作用方式)に基づく言語と意識の共働的作用だ、という点である。つまり、この作用は、言語LMに基づくものとして、卓れて前意味の意味への創設である。しかも、絶えざる覚醒と確認を要求する創設である。フッサールは晩年、この創設作用に関して、哲学を究極的創設によって課せられた目的論的な課題として把えるようになったが、<sup>(44)</sup>この創設作用は同時に言語的なものとして把え直さねばならない。<sup>(45)</sup>つまり、創設の言語としてのLM自体が、既に課題的なのである。<sup>(46)</sup>——しかし他方で、この創設作用によって創設された意味(具体的には「哲学の作品」)も、作品の言語としては一定の自然化(Naturalisierung)の危険に晒されている。この自然化とは、先のLMの往復運動及びそれによるLMの課題的性格の忘却である。つまり、超越論的な言語LMの意味作用方式を自然的な言語LSの意味作用方式にすり換え、LMの意味をLS

の意味つまり時間客観の意味にかえてしまうことである。現象学において、このことは大きな危険である。しかし、超越論的論理学が、言語の意味作用方式を明らかにする時、「哲学の作品」は再び往復運動の中に置き戻され、再活性化され、取り上げ直し (reprise) されるだろう。この時、現象学の用いる言語は、それが超越論的言語LMである限り、その言語自身の意味作用方式に基づいて、新たに現象学することを要求しているのである。

### 結

本稿は、生ける現在の次元で、現象学的反省と超越論的言語との関係を考察した。まず時間構成の基礎としての現在化作用そのものの構造を分析し、そこでフッサールが出会った困難（存在者化）を確認した。次に、超越論的論理学のひとつの試みとしてピゲを取り上げた。この二つの検討に基づいて、現在化作用の中に存在者化しない作用契機を確保し、それと共に、存在者化をLS型言語との対応関係の中で考察した。更に、存在者化しない作用契機に基づいて、究極的還元と言語LMを導入し、そこから生じる原理的な二三の問題を考察した。以上を通じて、究極的還元の可能性と、この還元における超越論的言語の基本的な構造とを示すことが本稿の狙いであった。

### 注

- 1) 周知のようにフッサールは静態的記述から発生的解明へと重点を移していくが、解明も広義の記述であり、ここではこの意味に解している。
- 2) フィンクによればフッサールの用いる概念には主題的概念と操作的概念とがあり、前者は後者によって解明されるが、後者自体は十分問われていない、とされる。『フッサールの現象学における操作的概念』
- 3) この区別は常俊宗三郎氏が日本現象学会（1982）において述べられた区別である。本論文では私の文脈で用いている。
- 4) この微妙な関係は創設作用及び自然化の問題と重なるが、次の機会に譲りた

- い。
- 5) 究極的の原語は *letzt* であるが、これは最後ではなく、*letztfungieren* としての生ける現在を指示すると解している。この還元については K. Held, “Lebendige Gegenwart” 及び拙論 “フッサール晩年の遺稿における他者理論の展開” (本誌74号) 参照・尚、本論文はこの拙論の内容に対してその超越論的方法論という意味を持っている。
  - 6) *Husserliana*, Bd. XV, S. 336. Bd. XVII, S. 224. Held. *ibid.* S. 146
  - 7) Ms. EIII 9, S. 73. (1931) von Held, *ibid.* S. 147
  - 8) Held. *ibid.* S. 148
  - 9) Hua. Bd X, この著書の中心問題は時間客観の構成であるが、一部には既に後期時間論の問題も扱われている。特に第三章及び附論VI, IX, 参照
  - 10) Hua. Bd. VIII, S. 88f
  - 11) Held. *ibid.* S. 68 尚, 以下主にヘルトの研究に基づく。
  - 12) 時間客観については『内的時間意識の現象学』参照。時間客観は時間の中の持続 *Dauer*, 恒続性 *Verharren* を持ち, その時間位置によって個体化されている。その故, 時間客観は「事実」の性格を持つ。
  - 13) *Spaltung* は同じ根から枝分れすること, *Zerspaltung* は完全に別のものになること, として区別される。Hua. Bd. VIII, § 40
  - 14) Held, *ibid.*, S. 80
  - 15) 存在者化は自己を時間客観として構成する作用である (注12参照)。客観化 *objektivieren*, 事物化 *versachlichen*, 広義の世界化 *verweltlichen*, 時間客観化 *verzeitlichen* とほぼ同義であろう。Ms. C10, S. 24. (1931). von Held, *ibid.* S. 90
  - 16) 時間化 *Zeitigung* とは「時間様態における存在者の構成である。」Ms. C13 III, S. 1, (1934) von Held. *ibid.* S. 38 従って, 根源的能与作用としての現在化と, 想起等を可能にする脱現在化 *Entgegenwärtigung* (Fink) の総称になるが, 自己反省においては自己現在化のみが問われるので, 現在化とほとんど同義に使われている。
  - 17) Held, *ibid.* S. 90
  - 18) Ms. C1, S. 6. (1934) von Held, *ibid.* S. 90 尚, ヘルトに依れば, フッサールは生ける現在を *nunc stans* という理念的性格において把えることによって, この存在者化の困難を越えようとするが, しかし, これは抽象にすぎず, 成功しないという。
  - 19) Held. *ibid.*, S. 122

- 20) ここでサルトルの非措定的自己意識 *conscience non positionnelle (de) soi* の問題が想起される。彼に依れば、反省以前の意識の中には自我は存在せず、従って、この意識は「ただ対象についての意識であり、そして意識自身についての非措定的意識であった。」このような前反省的事態を把える反省を、彼は「純粋な(浄化的)反省」*réflexion pure (purifiante)* と呼んだ。これに対して不純な反省は「反省された意識の中に自我を生まれさせる。」——以上のような指摘は生ける現在への還元の問題に共通すると言える。とはいえ、サルトルの二つの反省はどこが本質的に違うのか。彼にも超越論的論理学が欠けている。そのため一方では二つの反省の言語の意味作用方式の違いが見落とされ、他方ではこのことによって意識が「無」として再び準存在者化され、その発生的な深さの次元が見失われてしまった。非措定的自己意識について語るには超越論的言語が必要と思われる。『存在と無』『自我の超越』他参照
- 21) このことはフッサールが自然的な措定に対して、超越論的エポケーの遂行後の反省をも措定的なものとして把える時に暗示されている。Hua. Bd. XXIII, Nr 20
- 22) “De l’Esthétique à la Métaphysique” 本書については宇波彰氏の書評(『現象学研究』創刊号)がある。同氏はピゲの『言語表現の哲学』を訳されている。またピゲについて美学的見地から木幡順三教授(慶大)が「美学と現象学」(美学史研究叢書)他の論文で述べておられ、私自身、御指唆を受けている。
- 23) *ibid.* P. 1
- 24) *ibid.* p. 130 このような自然的環境としての言語を基にして言語と(身体的)意識の関係を問題にしたのがメルロー＝ポンティである。彼は言語を身体の所作として把えるのである(*geste linguistique*)。そしてこの言語がソシユール的な差異体系の分析に結びついて、晩年には逆に世界内身体の差異体系(*chair*)が考察される。この分析方向は一種の自然的な存在論(*intraontologie*)の方位であろう。ところが他方で彼は超越論的言語の問題も扱っている。それが「沈黙のコギト」の問題である。彼に依れば「語られたコギト」は実は「人思う、人あり」という匿名性である。しかしこの命題の意味は「沈黙のコギト」との出会いを前提する。しかし「沈黙のコギト」は自己及び世界についてあやふやな手掛かりしか与えない。それが真のコギトになるには言語が必要である。こうして、意識と言語は互いに前提しあうのである。このような分析はピゲの言語 LM の分析と極めて近いものだが、しかしそれはコギトの言語がそれ自体まさに哲学あるいは形而上学の言語だからである。しかもこの分析方位と、先の方位とはメルロー＝ポンティ自身においても統一されていない。「研究ノ

ト」での何度も問い直しがそれを示している。要するに彼にも真の超越論的論理学が欠けているのである。この問題は彼の創設作用 institution の理論と絡めて更に詳述する必要がある。

- 25) フッサールは言語に関してある意味で第一のエポケーは遂行しているが、第二のエポケーは遂行していない。それが彼の反省論に影響している。
- 26) signifiant; signifié は周知のように、Saussure の概念ではあるが、ソシュールでは前者は聴覚映像、後者は概念を指している。『一般言語学講義』参照。しかしピゲはもっと広い意味で用いている。つまり前者は意味作用を持つものとしての言語そのもの、後者はその言語によって意味されている実在、を指している。
- 27) このLSの内部で更に自然科学的言語と生活世界的言語を区別することもできる。実際この区別を主題にしたものとしてメルロー＝ポンティの「世界の散文」中の諸論文があげられるが、この問題も創設作用にも関係することを指摘するにとどめよう。
- 28) *ibid.* P. 149
- 29) 但し、私の考えでは、究極的還元の場面においては事情はこれほど単純ではない。そこでの言語LMは与えられた意味（前意味）をある程度（意味へと）創造してしまう。更に他方で、言語LLに関して、事象を意味へと創造するとは言っても、この事象は「端的な自然」（フッサール）ではなかろう。この事象も何らかの意味であろう。ここにも創設作用と自然化の問題を介して、LLとLMの「微妙な関係」があることだけを指摘しておこう。このことはメルロー＝ポンティの芸術的な言語論にも言えるだろう。「世界の散文」他参照
- 30) *ibid.* P. 164-165
- 31) ここでメルロー＝ポンティの「超反省」*surréflexion* が想起されるだろう。しかし超反省と言えども、言語LMを用いない限り、その再硬直化の危険は免れない。
- 32) *Hua. Bd, X, S. 74f*
- 33) *ibid.* S. 119 この自己意識様態が、サルトルの「非措定的自己意識」、メルロー＝ポンティの「沈黙のコギト」、ハイデッガーの「先了解」、ヘルトの「何か知られたもの」などに対応する。
- 34) ここで、この自己今化作用に基づく自己了解は、措定的反省によっては把握されないのだから、実践遂行における自己了解（先了解）だと言われるかもしれない。実際ラントグレーベなどは、この実践遂行をキネステーゼの問題として把握、更に解釈の立場に移行していく。しかし、解釈と措定的反省とはどのよ

うに違うのか。この点こそが問題である。私の考えでは、この問題に答えるのが、措定的反省の言語LSと、生き生きとした反省の言語LMの意味作用方式の違いであり、後者を更に解釈へと「接木」する(リクール)のは、この言語の問題に答えた後であろう。

- 35) 自我の時間客観は「第一の内在的超越」だが、それが真の内在としての生ける現在を象徴する、という奇妙な関係がここには成立している。これはJ. デリダの「差延」による自我の「痕跡」の問題に繋がる。『声と現象』他参照。
- 36) E. Husserl, "Erfahrung und Urteil", S. 75, S. 254, 山崎庸佑『現象学の展開』参照。また、ピゲもフッサールにおいては「知覚は、知覚に記号LSという意味を与える日常言語から切り離されていない」と批判している。私の考えでは、フッサールは自己知覚にまで、LS型言語を持ち込んで、自己を存在者化してしまったように思われる。Piguet, ibid. P. 171 参照
- 37) このことは、存在者化の機制が「与えられた意味について語る」ことを不可能たらしめることを示している。
- 38) Hua. Bd. I, S. 112
- 39) Held. ibid. S. 97
- 40) M. Merleau-Ponty, "Le visible et l'invisible" P. 232
- 41) Husserl, ibid. S. 24
- 42) Hua. Bd. XXV, Nr. 33 及び前掲拙論参照
- 43) E. Husserl, "Logische Untersuchungen. Zweiter Band, §9, Piguet, ibid. P. 155, P. 165 以下・ピゲは、フッサールの「意味志向, 意味充実」の考え方を「完成したものとしての言語から出発する」として批判している。
- 44) Hua. Bd. VI, Bd. XV
- 45) 創設作用についてはメルロー＝ポンティが論じている。しかし、彼の言語論には(注24)で述べたような問題がある限り、彼の創設作用の理論を扱うには更に多くの紙面を要する。それ故、この問題は別の機会に譲りたい。
- 46) フッサールは晩年、究極的還元によって生ける現在の超越論的相互主観性としての原事実を見出していたが、これは、言語LMの構造によって、存在者化されない課題性格として把えねばならない。
- 47) 『イデー』第二巻では、自然化は生活世界的(人格主義的)なものが自然科学的(自然主義的)なものに転化することであるが、ここでは超越論的言語の意味作用方式が自然的言語のそれへと転化することである。尚、芸術作品の自然化については、木幡順三「レトリック―その光と影」他、福田正子「芸術作品と生活世界」参照。